



新校舎竣工

～新しい学びの拠点として～

広島なぎさ中学校・高等学校
中学校教頭 瀧口 啓倫

新校舎竣工

平成20年8月18日ついに新校舎が竣工した。この新校舎は本学園の「なぎさ公園小学校」の設計も手がけられた建築家の村上徹先生を中心に、本校の白岩博明校長はもちろん前校長の八川有人先生、そして鶴学園初等中等教育研究センター長の松谷英明先生をはじめとする関係者各位の練りに練られた設計によって完成するにいたった。まさに私たちが長年待ち望んでいた新校舎の誕生である。

9月上旬の夏休み明けを前に、生徒に対して試験登校を行った。案の上、初めて新校舎に登校してきた生徒たちのあちこちから歓声があがった。「すっごーい！」「迷子になりそう！」「きれい！きれい！」と目を丸くしている。確かに私たちから見ても素晴らしい校舎だ。それ以上に、生徒にとってのはたまらない環境にちがいない。

遊び心あふれる校舎

アルミをふんだんに使い、遠慮がちに渋く光り輝く校舎の外観。むき出しのコンクリート壁と妙にマッチしている。そして目を引くガラスの透明感。こんな校舎が21世紀の学校のデザインとして流行るのではないかなという印象を持ち始めた。それくらい今の子どもたちに受けがいい。そして目に飛び込んでくるのが所どころに彩られた黄色や青色のトーン。そして遠慮もなく教室の内部や校舎のあちこちにコンクリートの円柱がドーンと居座っている。このなんとも言えないアンバランスさが新校舎の特徴とも言えよう。

正門には小さな天然芝の築山があり来校者の目を引く。設計者の村上先生に「あればどんな意味があるのですか？」と尋ねてみると「意味はありません・意味がないものがあつたっていいんじゃないですか・・」「はあ・・？」でも、最近分かってきた。あの盛り土がなかったら自動車が車止めを超えて校舎そばまで進入してくるかも知れないし、来校者の動線がばらばらに

なるのをさりげなく抑えていることを。さらに村上先生は「子どもたちが登って遊んだっていいじゃないですか・・」と笑顔で答えられた。

光あふれる校舎

天窓やガラスを多用し、直接光はもちろん間接光、通過光とさまざまに姿を変えた太陽の光が教室や廊下をやさしく照らしている。まさに光をコンセプトに設計された校舎である。そして教室。壁、床、ロッカーと教室内はすべて白い色で統一されている。白くて少し眩しいくらい・・。天気の良い日には蛍光灯もいらなくらい明るい。そんなこともあってか、生徒の姿が何倍にも明るく弾んでいるように見える。曇りや雨の日も妙に明るい。周囲の環境がこんなにも私たちの心を変えるのかと初めて実感した。

開放感あふれる校舎

教室に籠っているのがもったいないような環境だ。コンクリートの壁に囲まれた今までの教室とは一線を画する。なかでも南棟1階の教室は最初驚かされた。なぜなら、教室と外を隔てる壁はなく、自宅にあるようなアルミサッシを開けると天然芝の裏庭にそのまま出ることができるからだ。それも、裏庭と教室の床の高さは同じ。こんな開放的な校舎、見たことない。おまけに教室の窓から見える景色が素晴らしい。どの教室からも、みずどりの浜公園、校舎の中庭、郊外の山々、マリナーなどが窓いっぱい広がって目を楽しませてくれる。あまりありがたくはないのだが、私たちの授業が

退屈になったとき、彼らの気分転換にはもってこいのはずだ。

広い空間があちこちに広がっている。いままでの校舎とは対照的である。最初、私たちは、その空間をもう少し削ってでもいいから職員室なんかにもう少しスペースが欲しかったな・・という気持ちがあったことも事実である。でも実際に過ごしてみて、広い空間の大切さを改めて感じる事ができた。自慢の人工芝のグラウンドをはじめ、幅広の廊下や踊り場など生徒たちは実に有効に活用している。校舎内の廊下や中庭に置かれた色とりどりのオシャレなテーブルとイス。生徒たちはお弁当を広げたり参考書を広げたりと休憩時間や放課後はいつも満席状態だ。やっぱり学校にはこんな場所も必要なのだ。そのせいか生徒たちはストレスを感じずのびのびと学校生活を送っているように見える。無駄とも思える空間の大切さをあらためて認識することができた。

学びの原点としての校舎

校舎と校舎をつないでいる開放的な空中廊下。なんと3階部分には屋根もない。雨が降ったらどうするの？初めてその設計のお話を聞いたときはその意図が見えてこなかった。また、空中廊下に降り注いだ雨水を地面に流す鉄パイプの雨どいは私たちの頭上のあたりで突然途切れている。雨が降ると当然その途切れた雨どいから滝のように雨水が激しく滴り落ち、周囲の植栽に降り注ぐ。いまどきの子どもたちは、雨が降ってもそれを水と実感する機会は決して多くはないだろう。

建物に降り注いだ多量の雨水は私たちの見えないところで下水道管につながれ、流れていだけだ。雨は水だという当然のことを忘れかけている子どもたちに、そのことをさりげなく教えてくれる。これはほんの一例だが、校舎のあちこちにこうした何げない学びの原点が隠されている。

学校はいわば都市

よく考えられた贅沢な作り、そして楽しさ。校舎が有機的に結びついているのだと村上先生に伺った。そして学校はいわば都市であると。その意味が徐々に見えてきた。例えば中学生の教室から図書室に向かうルート。それは何十通りもある。なぜなら、1階はもちろん4つの棟の2階と3階がすべて空中廊下で結ばれているからだ。中学生が高校生の建物を通って行くこともできるし、職員室はもちろん進路室を経由して向かうことだってできる。それぞれの教室がまるで都市のように結びついている。そして空中廊下や建物のあちこちからガラス越しに見えるキャンパス内外の風景。見る場所によってまた違った姿を現す。このように隠された遊び心が子どもたちの感性を育てるのだと思う。そして学校がおもしろいものだという印象を植えつけるのだと思う。

終りに

学園創立50周年記念事業の一環としての新校舎建築という場に居合わせることができた幸運を感謝すると共に、本校の生徒、教職員を代表して、素晴らしい校舎を建築していただいた学園をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げたい。そしてこの広島なぎさ中学校・高等学校が学園発展の一助になることを願っている。来春からはなぎさ公園小学校出身生を初めて受け入れ、12年一貫教育という本校にとってまさに新しい時代の幕開けとなる。竣工式の際、理事長先生に「期待しているからね」と声をかけていただいたその言葉を胸に、12年一貫教育がよい形でスタートを切ることができればと思っている。生徒の感性を育み、創造性を磨く学びの空間として、十分すぎるほどの環境を与えていただいた。これならできる。私たちが思い描いていた教育ができるはずだ。さらに私たちの手で、この環境を十分に活用できる教育内容を作り上げていきたいと思っている。

